たい」

すると、まっ暗だと　おもっていたのに、きつねが　あらわれました。やっぱり　天気雨の　銀の　矢が　ふっていました。

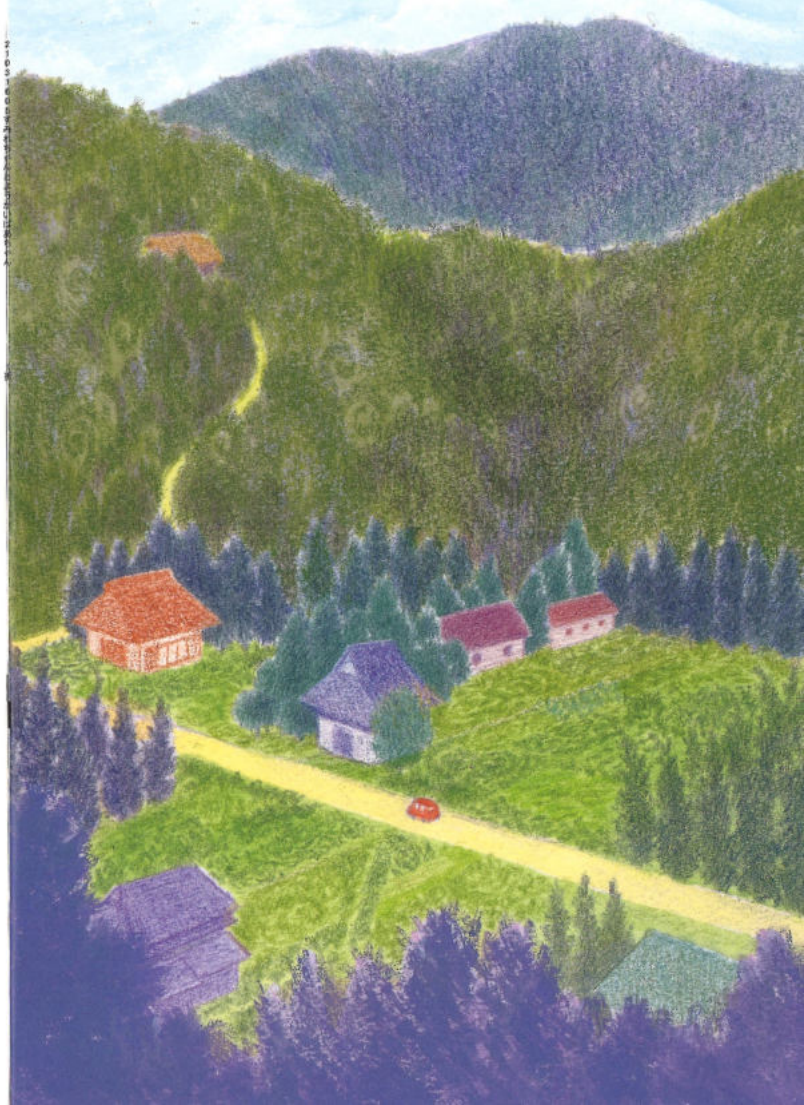
「アッ！……」

きつねは、ようかいばあちゃんの　つくった　かげのきつねと、すみれちゃんの　つくった　かげの　きつねをあんないして、山の　中の　きつねの　よめいりの　ぎょうれつの　ところに　つれてきたのでした。

それが　ようかい村でした。家が　二十けんぐらいの、小さな　村です。

くるまは、村の中を　走って、ぐうんと　山の　ほうにのぼっていきます。すると、つきあたりに　小さな　あき地が　あります。ここに　くるまを　とめます。

そこから、ようかいばあちゃんが　すんでいる　家の、かやぶきやねだけが　みえました。あき地の　ちゅうしゃじょうから、ものすごく　きゅうな、長い　坂道を　のぼっていくと、だんだん　家が　みえてくるのでした。



りませんでした。
外がわは　パリッと　していて、中は　モチモチ。まん中に　のざわ菜で　できた　アンが　はいっていて、ゆげが　でていました。
すみれちゃんは、フーフーして　かじりました。こうばしくて、のざわ菜は　シャキシャキして、ぼたもちとは　まるで　ちがった　おいしさが、口の　中に　ひろがりました。
「ようかいばあちゃん、こんなの　はじめて　たべたよ。